

平成23年3月11日14:46から15:37までの出来事 (2012.10.28の説明会で発表)

時	事 実 ・ 考 察	備 考
14:46	震度6強大地震発生	
	① 机の下などで頭部を守る指示。その後校庭へ避難。	
	② 校庭に出る際、A先生は「山に逃げるからな」と児童に声をかけた。体育館脇の山は傾斜が緩く、低学年でも登れる。すぐに山へ向って走り出した子もいたが、まず校庭に整列し、点呼。点呼終了までは5～6分。A先生らが校舎内の検索を行い、全員が確認できた。	中庭を向いて整列、指揮台の上にラジオがあった。 (すぐ置かれたかは不明)
14:49	6mの大津波警報発令。	
14:52	防災無線のサイレンが鳴り、6mの津波警報が伝えられた。高台への避難と海岸、河川へ近づかないよう繰り返し呼びかけ。※校庭に出て間もなくサイレンが鳴り、6mの津波のアナウンスを聞いたという証言(6年女子)と一致。A先生のFAXでも「サイレンが鳴り、津波が来ると言っていた」とある。少なくともこの時点で6mの津波が来るといいう情報はあった。	サイレンはこの時しか鳴っていない
	③ 長面方面へ向かおうとしていたスクールバスは、玄関前でいつでも発車できるように待機し、学校の指示を待っていた。運転手が避難を進言するが、学校からの指示は「待機」。5分あれば入釜谷方面への避難も可能。また、校長先生は電話で連絡をとった可能性がある。	バス会社から避難するよう無線も入っていた。
	④ A先生は山への避難を提案するが「何かあったら責任とれるのか」と言われ、強く言えなくなった。山への避難を支持する声はなかった。山はたしかに余震の度に揺れていて危険に見えた。ただし、木は一本も倒れていない。 教員間では、汚れたり、転んで怪我をすることで、 <b>責められるかもしれないという雰囲気</b> が支配していた。 <b>マニュアルも不備な上、誰も津波の避難場所を把握していなかった。</b>	マニュアルには「津波の時は近隣の空き地・公園」という記載。近隣には空き地も公園もない。
	⑤ 教頭先生も山への避難を考えたが、強く言えず。誰かが強く避難を訴えるのを待っていたが、誰も訴えなかった。A先生も強くは進言しなかった。	
	⑥ 迎えに来た保護者は十数軒、そのうち、早退や習い事のため、あらかじめ来ていた家もあり、引き渡しに手間取っていたとは言えない。証言からも明らかである。	保護者証言
	⑦ 地区の人は交流会館に避難しており、校庭は教員と児童、保護者以外はあまりいなかった。市役所の指導で、体育館に避難できるかどうか様子を確認した程度。地区民の対応に追われたということはない。	地区の方
15:00	⑧ 15時前後に迎えに来た保護者は、車内でラジオを聴き「6～7mの津波が来るから、山へ逃げて」と進言するが、対応したB先生は「お母さん落ち着いて、ここは大丈夫ですから」と相手にしなかった。	保護者、児童

15:14	⑨ 「10mの津波が来る」というラジオからの情報が、先生方に入り、輪になって会話をしている。子どもも状況を察知し、「ここにいたら死ぬ」「山に逃げよう」と訴えた。先生は答えず。一方で「絶対山だ」と泣きながら訴えていた先生もいる。	保護者，児童  危機感が共有されなかった。
	⑩ 校庭ではたき火の準備が始まった。一斗缶のような缶が二つ用意された。早い段階で「避難しない」という決定になったことが分かる。 (※学校としてどう動くかの決定は何もなかったという方が合っているかもしれない。大津波警報をうけての組織的な動きはほとんどない。)	保護者，児童
15:25	⑪ ラジオ，保護者，広報車からの情報により，津波襲来が現実味を帯びていた。それでも，まだ「来るはずがない」という根拠のない安心感が支配していた。C先生が，迎えに来る保護者の対応のために校庭に残ろうとしていたことから，「来るはずがない」と考えていたことが分かる。 市の広報車が15時25分「松原を越えて津波，高台へ避難」を呼びかけ通過。とりあえず移動しようと言ったことになったが，最初の段階で却下した手前，山への避難は言い出しにくかった。さんざん待たせたあげくに，結局，最初の判断を否定するわけにはいかなかった。	児童  A先生をはじめ危機感を持っていた先生は複数いる。(もしかすると全員?)
	⑫ A先生は2階に避難できるかどうか考え，校舎内にいた。教頭先生と共に決断を下す本部としての役割を果たすべき教務主任のA先生が，何度も校舎と校庭を行ったり来たりし，数回の短いやりとりしかしなかったというのは，不自然である。子どもの命を守る組織としての話し合いがきちんと成り立たなかったことがうかがえる。	A先生はほんとうに校舎内にいたのかは不明、点検していたのは校舎ではなく山?
15:36	⑬ 校庭から移動を開始したのは大津波がいよいよ迫って，川からはすでに水があふれていた時である。側溝からも水が吹き出していた。一応上級生が先頭となっているが，整列する余裕などなく，列は乱れており，学年は入り交じっていた。子ども達を向かわせた民家の裏は私道で狭い上，行き止まりになっている。地区住民は列の中に入っていない。	児童，地区の方
	⑭ 「三角地帯へ移動」と言ったのは教頭先生で，児童は自転車小屋の脇から出て，交流会館前までは歩いていた。県道を見に行った教頭先生は川からあふれる水を見て「もう津波が来ているから，急いで」と戻ってきた。児童はあわてて裏道の方に走り，書道教室の前やその一軒手前の家の脇を通り，県道に出ようとしたら川から波の壁が来た。先頭にいた児童があわてて引き返し，山に向かった。児童たちが追い込まれたのは，最も狭く，山の斜面も急な場所である。校庭から移動した距離は先頭の子で約180m足らず。移動時間約1分。	児童，地区の方
	⑮ 15時35分に車で家を出た釜谷の人が最上屋(商店)の前で一時停車したとき(15時36分)，児童はまだ県道に出ていない。間一髪で学校の脇の山に逃げた人の話では，山に駆け込むとき児童の列を見て，まだ校庭にも何人かいたとのこと。パニック状態だった。	地区の方
	⑯ A先生が校舎から出たとき，児童の列はすでに三角地帯へ移動を始めていた。その先に堤防を越えた大波が見え，とっさに山へ登った。	A先生に伝えず移動開始?
15:37	大川小に津波到達	